

萬葉集における不定語と不定の疑問

大 鹿 薫 久

キーワード…不定語・疑問文・係結び・推量・断定

要 旨

上代における不定の疑問文には、文中の係助詞「か」を持つものと持たないものがある。この「か」の有無について従来十分自覚的に取り扱って来たとは言えない。

本稿では萬葉集を資料にして、これらの文構造の違いに着目し、「か」を持つ文は大きく「か」によって導かれる不定部分とそれ以外のより確実に把握された部分の二つに分かれていることを指摘し、そこから解釈される意味の違いを指摘する。さらにこの構造的な違いと述語が推量の助動詞を含むか含まないかという点との相関から、「か」も持たず述語に推量の助動詞も含まれない文(例えば「誰聞きつ」)が、ある不定項を含む事態を単に写し取って素材のまま提出しただけの文であること、従ってこの種の文は例えば「誰かが聞いた」といった判断が前提されていないことになり、疑問の質として疑いの疑問文的な意味が濃厚になることを論じる。

一 はじめに

「いかに／いつ／たれ／なに……」などの、本稿で取り上げようとする語類について、私たちは決まった呼び方を持っているわけでもなさそうである。疑問詞、疑問語と呼ぶ場合もあれば、不定詞、不定語と呼ぶ場合もある。ただここでは「不定語」の名を使おうと思う。少なくとも、疑問詞、疑問語という用語はその実態に即していない場合があるし、不定詞と呼ぶのは品詞の類のようにそれらに共通する強い文法的な特性を持っているかのような印象を与える。

実態に即していないというのは、いうまでもなくこれらは必ずしも疑問文と一般に呼ばれる文だけを構成するわけではなく、所謂平叙文の中でも普通に使われる場合があるからである。もつとも疑問文を構成する場合にのみそれを疑問詞と呼ぶということも考えられるが、例えば次の1と2とでは疑問の質が異なる。

1 まだ誰も来ないのか／いつでも閲覧できますか

2 誰が来ていないのか／いつになったら閲覧できますか

もし2のように「誰／いつ」の具体的な内容を問うのが疑問詞、疑

問語だとするならば、疑問一般からこれらの場合だけを卓立する命名が求められるであろう。

また、これらは品詞のレベルでいえば、例えば名詞、例えば副詞といった文法的な特性を自らの中に持っているものであり、それらを越えて例えば英語の「疑問詞」のように必ず文頭に位置するというような性質を備えているわけではない。そこでさしあたって、その指示内容がはつきりと定められない、つまり不定的な指示をその語の意味として持つ、という極めて意味的な側面での共通性によって「不定語」と呼んでおきたいのである。

とはいえ、この不定語が実際に使われるのは多く疑問文の中であろうし、事実『萬葉集』の中でもその大半が疑問文の中で使われている。それは不定的な指示をその意味として持つという不定語の特性、即ち「代数の未知数xに通ずる意味把握」^{注1}によって、自らに對してであれ他の人に対してであれ、そのxの具体を求めて問うという表現に結びつきやすいからに他ならない。勿論この特性が問いという表現に必ずしも結びつくわけではない、ある特定の環境の許でxの具体が求められる必要がなくなる場合もある。それが平叙文の中で使われる場合、あるいは前記例文の1などの場合なのである。

ともあれ、不定語そのものが持つ意味の特性が、そのままxの具体が求められるというに問いに順直に結びつく場合と、ある環境によってxの具体が求められる必要が抑止される場合の二種があり、前者のような不定語の用法を有問、後者のそれを不問と呼び分けるとすれば、本稿は不問の用法について簡単に見たあと、有問の場合即ち「不定の疑問文」^{注2}を中心に考察することになる。

二 不問の用法

不定語の不問の用法はある特定の環境の許で抑止される旨前節に述べたが、萬葉集の場合の特定の環境とはどんなものなのか、概略次のようにまとめられるであろうか。

1 a 不定語十も

時はしもいつもあらむを(何時毛将有乎) …… (四六七)

……いつのまさかも(何時之真坂毛 常忘らえね (二九九六)

さ寝にはたれとも寝めど(孰共毛宿常) …… (二七八二)

b 不定語十も…打ち消し

秋立ちていく日もあらねば(幾日毛不有者) …… (一五五五)

……年月もいくらもあらぬに(伊久良母阿良奴尔) ……

……たれといふ人も(孰云人毛) 君にはまさじ(不益) (三九六二)

……たれといふ人も(孰云人毛) 君にはまさじ(不益) (二六二八)

我妹子がなにとも(奈何跡裳) 我を思はねば(不思想) ……

……不定語……打ち消し(但し「なくに」による場合のみ) (二七八三)

2

……不定語……打ち消し(但し「なくに」による場合のみ) (二七八三)

……だが故(誰故)に心尽くして我が思はなくに(不念尔) (二二七五)

……だがため(為誰)に千歳もがもと我が思はなくに(念莫国) (一三三五)

……後はたが着む(誰將著) 笠ならなくに(笠有莫国) (二二八一)

……後はたが着む(誰將著) 笠ならなくに(笠有莫国) (二二八一)

3

不定語十は

(二二八一)

4 づくには(何処者)鳴きもしにけむ…… (一四八八)
 独立した感動詞としての用法

波高しいかに(奈何)棍取水鳥の浮き寝やすべきなほや漕ぐべき (二二三五)

これらは、いずれも不定語(不定語を含む文節)に係助詞「か」の接しない場合に限られるのはいうまでもない。理屈の上では1bは結局1aに含まれるけれども、『萬葉集』の場合、「いくだ」のように打ち消しとしか使われないものもあり、また1aとしたタイプは「いつ」と「たれ」しかない(時代を限らねば「いつこも同じ秋の夕暮れ」「いくたびも摘め」「閑吟集」「何回も」「誰にも失敗はある」などのように枚挙に暇がない)ので便宜上分けておいた。また2の第三例目は不定語を含む体言句に打ち消しが接している場合で、はじめの二例とは若干タイプが異なる。さらに「くなくに」が不定語を受ける場合は他に「いく久さにもあらなくに」(六六六)幾久毛不有国、二五八三)幾久毛不有尔)があり例外なく不問の用法なのだが、「幾久さ」の方は1bに入れるべき用例であろう。

3は不問の用法というより、不定語の意味が変化して「それとは指摘できないが特定の或るもの」というほどの意味になったために「は」の後接を許したものの(挙げた例以外にも表記からだけでは訓みが確定できないが「三三三三、二八七七番歌の「何時は」がある)と考えるべきであろうし、4は呼掛けの感動詞に変化したものの(時代を限らねば、「まだ魚なども食はず今宵なんおはせばもろとともにてある。いづら」などと言ひて「蜻蛉日記」、「どれ、酒でも飲むか」など)と考えるべきであろう。なお、3、4とも本稿では行論上不問の用法の中に入れて考える。稿本の『萬葉集』の訓みに従えば、集中不定語(「なぞ」

を含む)四〇〇余例中、三四例がこの不問の用法で、1aが九例、1bが一六例、2が四例、3が三例、4が二例という内訳になる。

ところで、阪倉篤義博士は次のような用例について「過去・完了または現在の表現(終止形)で結ばれる時には、すべてこの不定称詞として解すべきであろうと思われる」と述べておられる(ここでは「不定称詞」とは本稿の不定語の不問の用法を指している)。

足日女神の命の魚釣らすとみ立たしせりし石をたれ見き(伊志遠多礼美吉) (八六九)

たれ聞きつ(誰聞都)こゆ鳴き渡る雁が首の妻呼ぶ声のともしくもあるか (一五六二)

ぬばたまの夜渡る月をいく夜経と(伊久欲布等)数みつつ妹は我待つらむそ (四〇七二)

もしそうだとすれば、不定語の結びが過去・完了・現在の終止形の場合も不問になる環境であるとしなければならぬ。しかし、これは少し疑わしいように思われる。

例えば博士は第一例目の「たれ」を「自分以外のだれか」、第二例目の「たれ」を「あなた以外のだれか」というふうに解釈なさっているが、「く以外の」という意味が不定語に積極的に解釈されるのは、打ち消しとの関係を持つ時に限られるように思われる。具体的には次のようである。

A 打ち消しに係る不定語
 (不問の用法に挙げた2の場合)

恋死なばたが名は立たじ(深養父、古今集卷二二恋二)なども、時代は下るが、同種のものである。

B 反語になる疑問文の不定語

おほかたはたが見むとかも(誰將見鴨)ぬばたまの我が黒髪を
なびけて居らむ (二五三二)

……吾が思ふ妹もありといはばこそ国にも家にも行かめたが
故か行かむ(誰故可將行) (三二六三)

Bは、「あなた以外の誰が見ると思つて、……なびかせましようか／
妹以外の誰のために行きましようか」という反語なのだが、反語で
ある以上当然に否定されることが前提となつていふと言えよう。従
つて「誰見き／誰聞きつ」が疑問文ではない(反語ではない)と解釈
して、かつ「誰」に「く以外の」という解釈を積極的に採るとすれ
ば、かなり例外的であるとしなければならぬ。

また不定語が係助詞「か」を伴わず、かつその結びが過去・完了・
現在(つまりは推量の助動詞が接しない)の終止形であるという確例は
博士の挙げられた三例しかないが、結びが終止・連体同形のため確
定できないもの(「誰知る」)、文末に「や」の接したものの(「いかに告
げきや」)等、この三例に準じて扱つても良さそうなものが他に僅か
ではあるが存在し、「不定称詞」説ではこれらを一括して説明できな
さそうに思われる。

それでは、確かに「かなり特殊」な「誰見き」等の不定語をどの
ように考えるべきなのか。そのことを考えるためにも、以下有問の
不定語を広く見てみよう。

三 不定の疑問文

不問の場合、不定語に係助詞「か」の接していないことがまず第
一の条件であつた。勿論「いつしか(何時加)妹が手を枕かむ」(二二
七七)などのように「いつ」に「か」の接したものが結果として「早

く」という意味を獲得している場合があり、不問のようにも思える
が、もとよりこれらは「いつか?」と問う心情を「早く」と解釈し
たのであつて、有問の不定の疑問文であると考えてよいものである。
さて、しかしながら、「か」が接していないものがすべて不問にな
るわけではなく、「か」の有無によらず不定語は不定の疑問文を構成
する。

A 吾が背子はいづく行くらむ(何所行良武)…… (四三)

A' いづくにか(何所可)舟泊すらむ…… (五八)

B 逢はむ日をその日と知らず常闇にいづれの日まで(伊豆礼能
日麻呂)我恋ひ居らむ (三七四二)

B' あら玉の年の緒長くいつまでか(何時左右鹿)我が恋ひ居らむ
命知らず (二九三五)

そこで、この「か」の有無と、それらと打ち合う文末が推量の助動
詞であるもの(以下、推量型の結びと呼ぶ)か、用言あるいはそれに完
了・過去の助動詞が接しているもの(以下、断定型の結びと呼ぶ)かと
いう点との二元のマトリクスで不定の疑問文をI~IV類に分けて考
えてみたい。ただ、結びが流れたり省略されたりしていると考えら
れるものについては推量型、断定型の区別がつかないので、左のI・
II類またはIII・IV類のそれぞれどちらに所属するか不明なものとし
て扱い、必要に応じて関説する。また、「——は/や不定語のタ
イプまたそれに準じて考えてよいものはこのマトリクスでは扱いに
くいので、別の類として一括しておく。

I類 「か」あり——推量型

II類 「か」あり——断定型

III類 「か」なし——推量型

IV類 「か」なし——断定型

V類 「行くはたが妻／見む人やたれ」のタイプ

ただし、集中の不定の疑問文で、この分類に係らないものがいくつかある。これらは以下の分析でほとんど考慮されない。単に数が少ないということだけではなく、本稿での分析に影響を及ぼすとは考えられないからである。それは即ち複合動詞の中に組み込まれた「か」を持つもの^{注7}、「か」の結び用法のものであるが、以下に念のため萬葉集中の全用例を挙げる。

我がここだしのはく知らにほととぎすいづへの山を（伊頭敏能山乎）鳴きか越ゆらむ（鳴可將超）（四一九五）

朝霜の消なば消ぬべく思ひつついかにこの夜を明かしてむかも（明鴨）（二四五八）

言出しはたが言なるか（誰言尔有鹿）小山田の苗代水の中よどにして（七七六）

玉勝間逢はむといふはたれなるか（誰有香）逢へる時さへ面隠しする（二九一六）

いつの間も神さびけるか（神佐備禰留鹿）香具山の鉾杉が本に苔むすまでに（二五九）

四 結びの活用形

まず、I～IV類について結びの活用形という点からみてみると、I・II類は「か」の結びとして当然連体形になる。結びの流れたものや省略されたもの（これらはI類かII類か分類不可能であるが）を除けば、積極的に連体形以外であることを示す例はない。勿論、I類は推量型の結びの助動詞は不定の疑問文では集中「む（も）／ら

む／けむ／じ／まし」以外に使われていないから、仮名書きからだけでは連体・終止のどちらか分らないが、次のような例によって連体形結びであることが知られる。

家に行きていかに我がせむ（伊可尔可阿我世牟）（七九五）
いづち向きてか（伊豆知武伎提可）我が別るらむ（阿我和可留良武）（八八七）

なにをかも（何物鴨）御狩の人の（御狩人之）折りてかざさむ（二九七四）

ところが、III・IV類の結びの活用形については、かつて佐伯梅友博士が指摘なさったように、このような助詞「が／の」の明記された例を見出すことが出来ないのである。つまり、連体形結びの確証が見出せない。特にIII類は数の上でも決して少なくはないのであるから、偶々そのような用例がないだけであるとも判断しにくい。平安期にはいると、

夕暮れはいづれの雲の名残とて花橘に風の吹くらん（古今集巻四秋上）

昨日こそさなへ取りしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く（新古今集巻三夏）

のような例が見られるが、「か」の係り用法の変質が平安期に入つて見られる以上、参考にはしづらい。

III・IV類ではこのような終止・連体不明のもの他、却つて終止形結びのもの、已然形結びのものが見られる。已然形結びのものはよく知られているようにすべて反語と解釈すべきものであるが、反語である以上言うまでもなく疑問文として扱ふことが出来る。これはIII・IVともに例を拾うことが出来る。

見えずともたれ恋ひざらめ(孰不恋有米)山の端にいさよふ月を外に見てしか

(三九三)

鶺鴒の浦に来寄る白波かへりつつ過ぎかてなくはたれにたゆたへ(誰尔絶多倍)

(二三八九)

注意すべきはこの已然形結びの例がI・II類に見出せないという事実である。「か」が連体形結びを要求するのであれば、それは当然と言えば当然のことなのであるが、しかしそれならば不定の疑問文で使われる「か」なしの不定語は連体形結びを要求しない、乃至は「か」ほど強くは要求しないことを示すからである。

終止形結びの確例は前節で挙げた「誰見き／誰聞きつ／幾夜経」の三例だけであり、IV類にのみ確例が見られることこれまた当然なのであるが、IV類の用例がきわめて少ないので、今「誰見き／誰聞きつ／幾夜経」以外の全用例を挙げてみる。

故郷の奈良思の岡のほととぎす言告げ遣りしいかに告げきや(何如告す八)

(二五〇六)

……汝をぞも我に寄すといふ我をぞも汝に寄すといふ汝はいかに思ふ(汝者如何念也)思へこそ……

(三三〇九)

妹が紐結八河内を古の皆人見きとここをたれ知る(此乎誰知)

(二一一五)

滝の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴き渡るはたれ呼子鳥(誰喚見鳥)

(二七一一)

春日なる羽易の山ゆ佐保のうちへ鳴き行くなるはたれ呼子鳥(孰喚子鳥)

(二八二七)

……過ぎかてなくはたれにたゆたへ(誰尔絶多倍)

(前掲・一三八九)

このうち「誰呼子鳥」の二例は「よぶ」を結びとせずに結びの流れたものとして考える方が妥当であろうから除外すれば、IVに所属すると考えられるものは前掲「誰見き」等を入れて七例にすぎない(その内一例は已然形結びである)。

さて、「いかに告げきや」は「き」が仮名書き例であつて終止形結びの確例と言えそうであるが、「いかに」という不定語を「や」が受けることについて疑義があるとし、「いかに」を感動詞相当としあるいは「いかに」で一旦切つて、「告げきや」だけで「告げたかどうか」を問う「疑いの疑問文」であるとする考え方が^{注9}ある。また「いかに」を「告げきや」が受けているのだが「や」があるのは不自然で従つて変則的な文であるという説も^{注11}ある。つまり、解釈が様々に有り得る歌なのである。確かに不定語に「や」が後接して構成される不定文節・不定句がないのは事実であるが、不定文節・不定句を受ける文節に「や」が接している例はないわけではない。

……なにしかも(何然毛)吾が大君の立たせば玉藻のまころ……
朝宮を忘れ給ふや(忘賜哉)夕宮を背き給ふや(背賜哉)……

(二九六)

……隠りて居る葦蟹を大君召すとなせむに(何為牟尔)召すらめや(良米夜)……

(三八八六)

右のIV類の例「いかに思ふ」も例えば『萬葉集注釋』が「也」を不読とせずに「や」と訓ませているように、もし「や」を訓むのだとすれば「いかに」を「思ふや」が受けた、つまりここでの例とすることも出来る。

とすれば、必ずしも不定語を受ける文節に「や」が接していること自体に疑義となえる必要はなく、また変則的とする必要もない

ように思われる。もつとも「いかに告げきや」は解釈上「いかに」のあとで文が一旦切れているとする考え方を捨て難いのだが、IV類の例として考えられるのも間違いなく、しかも終止形結びと考えてもよいもののように思われるのである。

「いかに思ふ」と「誰知る」の例は仮名書き例ではなく、特に「誰知る」の方は已然形で訓んでも解釈が可能なのだが、堀本の『萬葉集』の訓みに従うとすれば、「思ふ／知る」となり、終止・連体同形で活用形を決定できない。ところがIV類は已然形結びの「誰にたゆたへ」とこの二例を除いて残りの四例は終止形結びと考えられるから、「か」の接しない不定語の係り十断定型の結び」という条件では原則として終止形結びであるといえるであろう。そうだとすれば、述べてきたI〜IVの結びの活用形は次のように整理できる。

- I類——連体形
- II類——連体形
- III類——終止・連体不明 已然形
- IV類——終止形 已然形

五——「か」の有無と不定語（I・II類）

I・II類は「か」あり、III・IV類は「か」なしであるが、「か」の有無によって解釈上の違いを見出すことが難しいように思える。例えば三節冒頭のA・A'、B・B'ではなんらかの違いを見出すことはこれだけでは難しい。ところが各不定語を通じてI・II類とIII・IV類との間には大きな違いがある。前述のように助詞「が／の」はI・II類でしか使われないのである。これは阪倉博士が述べられたように¹²⁾、「か」よりあとの全体が一纏まりとなつて「か」によって導かれ

る係りの部分と関係し合うということを意味するであろう。連体形結びはその一纏まりということのこの場合の現象でもあったのである。

一纏まりになるということはいうまでもなく文がそこで切れるということであり、切られた二つの部分における構造を——係り結びという構造を——持つということである。不定語が「か」に導かれて係りとなるこの場合、一方がその意味の不定性ゆえにその具体が求められねばならないとすれば、一方はその具体が問われるための前提という役割（構造における）を担うであろう。殊に結びが用言、またはそれに完了・過去の助動詞のついたものによつて構成されているII類の場合、一纏まりの部分が眼前の様子であつたり現在の状態であつたりまた確認済みの事態であつたりすることが非常に多いために、前提としての役割は鮮明である。

- 吾妹子がいかに思へか（伊可尔於毛倍可）ぬば玉の一夜もおちず夢にし見ゆる（美由流）（三六四七）
- ……なにしかも（奈何鴨）巨言をだにもこことだぞしき（芝寸）（六八九）
- ……たに障れかも（誰障鴨）玉梓の道見忘れて君が来まさぬ（公不来座）（二三八〇）
- 門立てて戸も閉したるをいづくゆか（何処從鹿）妹が入り来て夢に見えつる（所見鶴）（三二一七）
- ……吾が標めし野辺の山吹たれか手折りし（誰可手乎里之）（四一九七）

「夢に見える／こんなにも乏しい／君がいらつしやらない／夢に見えた／山吹の花を手折つた」ことは、この際いわば確実なことで、

それを前提として「どんなに思うからか／なぜなのか／誰に邪魔されてか／どこからか／だれがか」と問うのである。誤解を恐れずに現代語訳の適当な文型を示せば、およそ「不定語……用言十のか」といったものになるであろう（どう思っているから夢に見えるのか／どうして自言さえこんなに少ないのか……）。この時「の」が必要なものは「の」がそれ以前の叙述を二纏めにし、さらに「のだ」の文体が「^{注13}確實」なことであることを表現するからである。

といえば、実はこのような構造によく似たものがV類ということができる。V類は基本的には「——(体言)は／や不定語」という構成になっているが、「は」または「や」が接しているということは「——」自体は確實な事態なのであり、そこに「は／や」が接して文を二分し、さらにそれと係結ぶのが不定語という構造なのである。確かに語順構成はII類と逆になっているがよく似た構造だとしてよいのではなからうか。もともと、語順としての現れの違いに依じて当然に表現上の意味が微妙に違ってくるであろうけれども。

梅の花散らくはいづく(知良久波伊豆久)

(八二二三)

……我が門に養笠着ずて来る人や誰(来有人哉誰) (三二二五)
なお、「何の狂言(二五八三)」「何の伝て言(二五八二)」のような表現もここでは「(いふは)何の狂言」などの表現上の省略とみて、このV類に入れてよいであろう。

さて、断定型と称した結びが必ずしも眼前の様子、現在の状態、確認済みの事態即ち確定的な事態を表すと単純には考えることのできぬ例がある。反語以外の例は非常に少ないが左のような歌が存在する。

さきはひのいかなる人か(何有人香)黒髪の白くなるまで妹が声

を聞く(妹之声平聞)

(一四一一)

……いつよりか(何時従鹿) 見ぬ人恋ふと人の死にせし(人之死
為) (二五七二)

「妹が声を聞く」ことは確かに眼前の様子や確認済みの事態ではない。けれどもこの歌はある条件下での「黒髪の白くなるまで妹が声を聞く」という真実を前提に問うているのであって、従ってそれはいわば真実に基づく確定的事態というべきものであろう。また、第二例のように反語になる場合は確定的な事態が例えば「人は死なない」という否定された状態であることを了解した上で、しかし敢えて「人が死んだ」ということを一旦確實なこととして、それを前提として問うている。従ってこれも反語成立のために否定されることとが予定されている仮構された確定的事態ということが出来る。推量型の結びであるI類も基本的にはほぼ同様に考えることが出来る。

……云はれし君はたれとか寝らむ(与孰可宿良武)

(五六四)

春日野の藤は散りにてなにかも(何物鴨)御狩の人の折りてか

ざさむ(折而将挿頭)

(一九七四)

わたつみのいづれの神を斎はばか(何神乎斎祈者歟)行くさも来

さも船の早けむ(船之早兼)

(二七九八)

朝に日に見まく欲りするその玉をいかにせばかも(如何為鴨)手

ゆ離れずあらむ(従手不離有牟)

(四〇三)

海の底沖つ白浪立田山いつか越えなむ(何時鹿越奈武)妹があた

り見む

(八三)

ただし、右の例でいえば「寝ていること／御狩りの人が折って挿頭にする事／船の進みが早いこと／……」などは話し手にとって「い

ま、ここ」での事態ではなく、いわばそのようにありうる(ありえた)事態でしかない。つまり推量の対象としての蓋然的な事態なのであるが、しかし「か」という係助詞の存在による文構造から、それらはより確実な前提として機能し、不定語の具体が問われているといえよう。従ってⅡ類と同じように「誰と寝ているのだろうか／何を挿頭にするのだろうか／……」といった現代語での解釈が概ね成り立つであろう。もつとも推量型の結びの助動詞「む」が意志的な意味である場合は、このような公式的な現代語訳は通用しない。

吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ(何時可將示) (二七九)

常知らぬ道の長手をくれくれといかにか行かむ(伊可尔可由可牟)…… (八八八)

けれどもそれはむしろ現代語と古代語との違いによるのであって、「む」が意志的な意味を濃厚に持つとしても、その意志の対象はやはり蓋然的な事態であることに変わりなく、また述べたようなⅠ類の構造が変わるというわけではない。

ところで次のように前提の部分が確実なこととして捉えられているだけではなく、事実上客観的には確定した事態の例も数は少ないがあるにはある。

秋さらば相見ぬものをなにしかも(奈尔之可母)霧に立つべく歎きしまさむ(奈気伎之麻佐牟) (三五八一)

……とみ浪の立ち塞ふ道をたが心いたはしとかも(誰心勞跡鴨)ただ渡りけむ(直渡異穴) (三三三五)

これらは、前提部分に述べられる行為の理由・由来や意図・目的・方法などいわば行為の背景が不定語によって述べられる、従って背

景が問われる文に限られている。ここでの背景は話し手にとって「いま、ここ」での事態でもなくまた確認しえた事態でもなく、それを含むことによって文全体として蓋然的な事態になっているのである。

以上のことから、Ⅰ類の推量型の結びの文では蓋然的事態が大きくより確実な部分と不定の部分に分かれ、それらが係り結ばれているという構造になっているといえる。

さらに係結的構造を持つということは、前提部分が確定的な事態であれ、蓋然的事態であれ、「か」に導かれる不定語と前提の部分とを結ぶ陳述がⅡ類においては断定によっており、Ⅰ類ではそれが推量によって示していることを示している。「む」や「らむ」がそれに接している用言に働かないというのではない。繰り返しになるが、むしろ推量の助動詞の对象的な意味は直接する用言に積極的に働いて、話し手にとって「いま、ここ」にはない事態、話し手にとって確認し兼ねる事態、即ち蓋然的事態であることを示す。しかし、推量し、文を最終的に成立させるといふ作用の意味は「か」の結びとして、切られた二つの部分を結ぶという局面でより積極的に働いているのである。そしてその結果として、このⅠ類の表現的な意味は不定語の具体を推定的に求めるというような解釈がなされることが多いのである。

五十一 「か」の有無と不定語(Ⅲ・Ⅳ類)

以上とは逆に「か」の使われないⅢ・Ⅳ類は不定語とそれを受ける語との間に明瞭な切れがなく、不定語を含んで全体で一つの構造を持つということになる。

Ⅲ類は文末が終止・連体不明であったが、もし連体形結びになるのであれば、連体形結びで一つに括られる部分はどこなのであろう。文全体なのか、それとも例えば不定語を含めそれ以下の部分なのか。文全体とするならば、やはり全体で一つの構造ということになるし、不定語を含めそれ以下の部分というのなら、「か」の有無に拘らず不定語は「か」と同等の係結びの機能を持つことになる。ところが既に述べたように、萬葉集において「か」なしの不定語は連体形を要求しないとまではいえなくても「か」ほど強くは要求しなかった。従って、文末が終止・連体不明のⅢ類にあって、仮に連体形結びであったとしても、不定語とそれを受ける語との間には係結びの切れは存在せず、全体で一つの構造を持つということになろう。不定語の具体を求めるための、確実なこととしての前提的部分はⅢ・Ⅳ類にはなく、Ⅲ類では不定語を含んだ事態全体が推量あるいは意志される。つまり推量するという作用的な側面に関していえば、蓋然的事態がより確実な部分と不定的な部分に分かれその係り結びに働くのではなく、全体としての蓋然的事態を対象として、推量する（それが最終的に文を成立させる）という作用として働く。「か」の文中における存在によって確実なこととして前提的に機能した部分も、決して確実なことではなく単なる蓋然的な事態として推量されることになる。例えば次に挙げるⅢ類の例の第一例は、「晴れ晴れない私の心は誰を見れば晴れるだろう（か）」といった解釈になるであろうが、「晴れる」ことは、勿論確実なこととして捉えられているのではなく、あるいはそうならないかも知れないという否定的な契機を蔵した蓋然的な事態として推量されている。

その蓋然的事態の一部が不定的に捉えられている文がこのⅢ類な

のであり、不定語ゆえに問われる文、即ち不定の疑問文たりうるのである。以下、Ⅲ類の例をいくつか挙げる。

九月のしぐれの雨の山霧のいぶせき我が胸たを見れば止まむ（誰
乎見者將息）
（二二六三）

我が背子はいづく行くらむ（何所行良武）沖つ藻の名張の山をけ
ふか越ゆらむ
（四三三）

…行く我をいつ来まさむと（何時伎麻佐武等）問ひし兎らはも
（三八九七）

玉津島見れども飽かずいかにして（何為而）包み持ち行かむ（將
去）見ぬ人のため
（二二二二）

世の中をなにに喩へむ（何物尔將譬）朝開き漕ぎ去にし舟の跡な
きごとし
（三三五一）

現代語訳による解釈にこだわる必要はないのだが、Ⅰ・Ⅱ類が「のだ」文にほぼ対応しているのだとすれば、Ⅲ類は確実なものとしての前提部分を持たないのだから、「の」を使わない文に対応していることになる。確かにそのような訳してよい場合が多い（誰を見れば晴れるだろう（か）／我が背子はどこを放しているだろう（か）／いつお帰りになりますか）のであるが、むしろ「のだ」文を用いた方がより自然な例もある。現代語の「のだ」文における「の」の文に対する働きと、古代語の不定の疑問文における「か」の係り用法による働きが同じでない以上当然なのであるが、特にⅢ類の次のような例、即ち目の前に現われる事態や既定の事態が理由や意図・目的込みで全体として推量される場合、現代語では「のだ」文で解釈するのが普通であらう。

木の暗の夕闇なるにほととぎすいづくを家と（何処平家登）鳴き

渡るらむ(鳴渡良武)

(二九四八)

何せむに(何為)命継ぎけむ(命継) 吾妹子に恋ひざる先に死な
ましものを注14 (二三七七)

勿論これは現代語の問題(「ののだ(ろうか)」と「くだ(ろうか)」の用法の問題)であるが、しかしながらこれらを現代語として自然だからといって「のの(ろうか)」と翻訳すれば、これらが仮に「いづくを家とか鳴き渡るらむ/何すとか命継ぎけむ」である場合と同じになつてしまふ。現代語としてはそうとしか言い様がないにしても、「鳴き渡っている」こと、「命を長らえてきた」ことが眼前ないしは既定の事態でありながら、そこだけが不定語と切り離されて確実なこととして捉えられずに、全体が蓋然的な事態として推量されていることが注意されねばならないであろう。つまりどこかを家と思つて鳴き渡っているかどうかは分からない、それは確実ではない、あるいは何かのために生きてきたかどうか分からない、というような事態の把握のもとで、しかしありうる蓋然的な事態として推量されていると考えられるのである。

以上のようにI・III類を考えてきたが、それならIV類はどのような考えられるだろうか。この類の文末は推量型ではなく具体的には完了・過去の助動詞あるいは動詞(「や」の接したのも含む)であつた。今までの用語を使えば、それは蓋然的な事態ではなく確定的な事態を表すものである。しかもII類と異なつて「か」は使われず、確実なこととして前提的に機能する部分と不定的な部分に分かれるといつた構造は持たない。

推量型の結びであれば、前提としての確実なことという把握があるうとなかろうと、われわれに与えられる事態は蓋然的な事態として、

推量するという作用の対象となりうるが、断定型の結びでは前提としての確実なことという把握がなければ、それは確定的な事態として、断定するという作用の対象にはならないであろう。とすれば、論理的にはIV類はありえないか、もしくはIV類は断定するという作用によつて成立する文ではないか、どちらかだということになる。けれども事実上IV類は存在するわけであるから、この類の文は断定という作用によつて成立した文ではないということになる。ということは、まだ文成立以前の形であるか、あるいはある事態を単に写して(素材のまま)言語場に提出しただけの文なのであつて、その意味でも「かなり特殊」な文なのである。

例えば「誰が見た(下)」(下は下降調のイントネーションを示す)という形式は、普通このままでは使われることがない。それはこの形式に断定という作用が働かないからである(「誰が見たの(下)」誰が見たのだ/誰が見たのだ/誰が見た(下)はこのままで使われ、自問にも他問にもなる)。しかし「誰が見た(上)」(上は上昇調のイントネーションを示す)とすれば、ふと心に浮かんだことがらをそのまま自問した文、あるいは聞き手に問うた文としてありうる文になる。つまり、文の内部に文成立の根拠が全面的に求められるのではなく、句を言語場に提出する際の形式ともいへば上昇調のイントネーションを俟つてこの文は成立する。勿論IV類のイントネーションを知ることとは出来ないが、以上のような文のあり方とIV類は類同的であると考えられるのである。そしてこのこととIVが終止形結びを形式として持つことが対応する。即ち、動詞の対象的な意味は終止形にもつと顕著に現われるからである。注16

しかしまた、IV類が断定するという作用に係らないとすれば、当

然に判断が承認されていない文（この場合は断定の保留）に似た側面を一方では持つ。不定の疑問文について『それは何かである／ここはどこかである』という判断がすでに承認されていて、しかし『なに／どこ』が具体的意味を不定のまま指示することによって、具体的意味の補充が予定されている』と述べ、承認の保留された疑いの疑問文との質的な違いを指摘したことがある。従つてIV類は不定の疑問文でありながら疑いの疑問文に似た側面も持つていることにもなる。例えば「誰聞きつ」であれば、「聞いたかどうか」が問題になるという解釈も有り得るような文なのであろう。

以上のようにIV類を考えると、それぞれの例がある程度よく理解できるように思われる。八六九番歌「……石を誰見き」は天平二年七月一日憶良が旅人に贈つた歌三首の中の一首で、他の二首八六八、八七〇とも疑問表現の歌（しかも自問の歌）になっているところから、この歌もまたふと心に浮かんだことがらをそのまま自問してみた疑問表現として理解することで、全体が「謹以三首之鄙歌、欲写五藏之齋結」という気持ちにそつたものになる。またあるいは「だれか見たか」のように「見たか見なかつたか」と自身に問いかけることで、自分の見たい気持ちを表現したとも考えられる。巫部麻蘇娘子の一五六二番歌「誰聞きつこゆ鳴き渡る雁が音の妻呼ぶ声のともしくもあるか」もまた、「雁が音」の「ともし」さに心をうたれてふと漏らしたつぶやき「誰聞きつ」であつたであろうし、それが疑いの疑問文のような側面を持つからこそ、それに和えて家持は聞いたかどうかを問題にして「聞きつやと妹が問はせる雁が音は……」と詠んだのだと考えられる。因みに『日本古典文学全集・萬葉集二』（小学館）では「どなたか聞いたでしょうか」と疑いの疑問

文ふうにしてある。一五〇六番歌「……いかに告げきや」、三三〇九番歌「……いかに思ふ……」は明らかに「ほととぎす」「汝」に対する問い掛けであり、問い掛けであることにおいてこれらの文は成立している。またこれらは「そのように告げたかどうか／そのように思うかどうか」が問題にされていると解釈しても差支えない歌であり、実際三三〇九番歌は続けて「思へこそ……汝が心待て（そのように思うから……あなたの心を守つのです）」と応える。さらに四〇七二番歌「……幾夜経と数みつつ妹は……」は、「幾夜か経た」と断定しているのであれば指折り数える必要はないわけで、自問してみたそのことに対して知らず知らずのうちに答えようとする過程としての「数みつつ」なのであろう。家持は自分と同じ月を見ながらつぶやく妻の姿をありありと想像したのであろう。

しかし一五一五番歌は作歌状況がはっきりしない。この歌は「詠河」の題詞のもとに一六首並べられた最後の歌であり、前の歌一一四番歌とともに「結八川（河）」を題材にしている。この前歌が「我が紐を妹が手持ちて結八川またかへり見む万代までに」という歌であつてみれば、一五一五番歌「妹が紐結八河内を古の皆人見きとここを誰知る」は作者の思わず漏らしたつぶやきとして編者が前歌と対比的にここに持つてきたと考えるのは強引すぎるだろうか。ともあれ反語の例一三八九番歌「……誰にたゆたへ」以外、作歌状況の分かる歌では述べてきたIV類の解釈と懸け離れるものはないように思えるのである。^{注16}

六 さびしい

以上、萬葉集における不定語の使われる例について見てきた。従

来係助詞「か」の有無についてどちらであつても不定の疑問文であるとするのみで、特にその差について注意されてきたとは言ひ難い。平安期以降「か」そのものの変質があり、不定語に接する「か」以外は文中用法がなくなつた。そのことと平行して不定語は「か」が接していなくても宣長の云うように原則的には連体結びを要求するようになる。不定語の文法的な性質もまたなにかがしかなの変質を遂げたのである。そこではおそらく「か」の有無にかかわらず、同じような構造、同じような意味を実現したのであろう。それはやがて不定の疑問文にも「か」の係用法が使われなくなる準備であつた。しかし、それと上代の不定の疑問文を同一視することはできない。

とはいえ、本稿でⅠ・Ⅱ類とした「か」の用いられた用例とⅢ類とは述べたような構造上の差が認められるものの実現されてある意味の差は大きいとはいえない(第三節冒頭のA'A', B'B'を参照。仮に現代語の「のだ」文の性質を利用して解釈してみたが、例えば誰かに会わせられることになつてゐる場合、応接間で待つてゐる間は「誰に会うのだろうか」と思つても「誰に会うだろうか」とは思われないが、街に出ていく前には「今日は誰に会うだろうか/会うのだろうか」の両方が可能であり、両方とも可能であるという点において両者の区別は難しい(勿論意味の上でも異なることは現代人であるわれわれには明白である)^{注20}。従つてⅠ類とⅢ類の対比においてなぜ一方が「か」を用い一方では用いないかは、作歌状況が十分に明白とはいえない萬葉集の個々の歌では分からない。というところに、「か」の有無による意味の差に注意が向けられなかつた原因があるのではないか。そこで本稿は構造上の差から意味を解釈したが、それが強引にすぎたのではないかと恐れる。ましてⅣ類はⅠ・Ⅲ類とはかなり違

つた文であること、つまり終止形結びであることに加えて「か」が用いられないという構造に注意することで、論じてきたのである。諸賢の批正を請う次第である。

注1 森重敏氏「日本文法通論」(昭和三四年一〇月 風間書房)

注2 拙稿「疑問文の解釈」「語文」五五輯(平成二年一月)。表現の上からはよく知られた「説明要求の疑問表現」(宮地裕氏「疑問表現をめぐつて」『国語国文』二〇巻七号 昭和二六年七月)に等しい。

注3 集中の不定の疑問文で助詞「か」にかわつて「ぞ(そ)」の用いられているものがある。これらは「か」に準じて考えてもよいし、またそのように扱つても本稿の論旨は変わらないのであるが、不定の疑問文における「か」と「ぞ(そ)」の違いについて明確に見通しを持つてゐるわけではないので省いた形で考察をする。従つて不定語「なぞ」も「なにこそ」と考えられるから考慮に入れていない。また、「あど」「あぜ」も本稿の対象外である。なお以下の本文・訓みは佐竹昭広・木下正俊・小島憲之氏『萬葉集・本文篇』(昭和三八年六月 橘書房)による。

注4 阪倉篤義氏「石をたれ見き」「解釈と鑑賞」(昭和三一年一〇月)

注5 富士谷成章「あゆひ抄」「大旨」も「疑の挿頭」が「幾秋書きつ」のように「末をもて打ち合へるは……疑の打合にあらず」と述べているが、それは平安期以降の例についてであろう。

注6 阪倉篤義氏前掲論文

注7 複合動詞の中に「か」の組み込まれたものは、「か」が文構造にまで作用しないと考えるので、本稿の分析にはさしあたつて影響しない。

注8 佐伯梅友氏「萬葉集の助詞二種」『国語国文の研究』二二号(昭和三年七月)

注9 拙稿前掲論文。これも表現上の規定としての「判定要求の疑問表現」

(宮地裕「疑問表現をめぐって」に等しい。

注10 澤瀉久孝氏「萬葉集注釋」巻八(昭和三六年一月 中央公論社)当該歌

注11 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広氏「日本古典文学全集・萬葉集三」(昭和四八年一〇月 小学館)当該歌

注12 阪倉篤義氏前掲論文

注13 堀口和吉氏「『のだ』の表現性」「山邊道」二九号(昭和六〇年三月)

注14 第二例目は訓みの点で確例とはいえないが、Ⅲ類中どうしても「だ文」で翻訳せざるをえないものは恐らく挙げた二例しかないと思えるので、敢えて掲出した。

注15 「なにせむに」に「か」のついた例はなく、また「なにせむとか」の例もないのでほぼ同様の意味である「なにすとか」と仮に替えた。

注16 橋本四郎氏「動詞の終止形」「国語国文」二二巻一二号(昭和二八年一二月)

注17 拙稿前掲論文

注18 古事記の歌謡の例「横去らふいづくに至る(伊豆久邇伊多流) 伊知遅島美島に着き……」(応神記)もまた、問答的文脈の中にある。

注19 本居宣長「紐鏡」「詞玉緒」、また松城俊太郎氏「疑問詞疑問文は連体形で終止する」「国文学言語と文芸」七六号(昭和四八年五月)も平安期以降の例を詳細に調査し、原則的に連体形結びであることを論じている。

注20 田野村忠温氏「現代日本語の文法Ⅰ」(平成二年一月 和泉書院)では「……のか」と「……か」の違いについて詳しく論じられている。

——関西学院大学助教授——

(平成三年四月十六日 受理)